

立命館大学建設会

発行所
立命館大学建設会事務局
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部
都市システム系事務室内
令和元年8月

第33号

会長挨拶

建設会会長

中谷 恵剛

昭和四十八年卒



二〇一八年秋の建設会総会において会長を拝命いたしました中谷です。

伝統ある立命館大学建設会会員各位におかれましては、日頃より本会の諸活動に多大のご理解、ご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

また、各支部や学生部会、学系の先生方に於かれましてはそれぞれのお立場で、本会の活動の活性化にご尽力いただいておりますことに対し深く敬意を表する次第です。

ございます。

さて、元号が令和となり一つの区切りを迎えたところですが、明治の中期に生まれ明治・大正・昭和の三時代を生き抜いた私の祖父母と二十数年一緒に暮らした身として少し感慨深くかつ歴史は繰り返すものだと改めて感じている今日この頃です。

昭和の中頃(二十五年)に生まれた私も三時代を生き抜いたのですが、言うまでもなく時は途切れず進

んでおり元号が代わるという一つの区切りではありますが、賑やかではあったものの、社会の何が変わったのかという感じも否めません。

ところでインターネット、AI、IoTなど情報・技術の革新ぶりは目を眩るものがありますが人間がしっかりと基本を押さえておく必要があるでしょう。

AIなど膨大なデータを瞬時に判断していく便利さをうまく使っていくことは当然ではありますが、判断のプロセスを一定理解しておかないと単純に結果のみを受け入れる、あるいは利用するということであってはならないと考えています。

こうした技術革新と建設会(会員諸氏)、あるいはかつての土木工学科から現在の環境都市工学

科・建築都市デザイン学科で学んでいる事との関係を考えてみると、例えば測量・設計・計画に必要なデータ収集・整理・作図のみを見ても格段に「手間」が省け効率が高くなっていますし、様々なものを構築・造営するプロセスにおいても同様のことが見られます。

何かにつけ「迅速さ」が求められる現代ではありますが、便利な道具を使えるようになった今の時代であるからこそ今一度じっくりと人間の感性を磨き、個性を発揮するといったことが重要であろうと思っています。

持続可能なということが言われていますが、人口減少など社会経済情勢の変化にあわせつつ、より良い社会を構築していくための工夫が必要でしょう。例えば子育て世代をターゲットにわが自治

体へ誘導するとかではなしに、あらゆる世代が暮らしやすい街づくり、生活環境づくりを意識しないと、長期的にはそうした自治体の人口ピラミッドのバランスが「変形」します。

建設関係(重要な社会基盤づくり)にながしかの関わりを持つ我々が、直接プロジェクトや政策等に携わることがなくても将来に向けて、一住民としても意識をしておくことが必要と考えています。

最後になりますが、建設会会員の皆様の益々のご活躍を祈念しつつ、情報交換・共有の機会、先輩・後輩・学生・教員・学園を結ぶネットワークとしてわが立命館大学建設会活動の一層の充実を図るため、ご理解ご協力を頂きますようお願い申し上げます。

学系の近況報告

都市システム学系 学系長

小林 泰三



二〇一九年度学系長を拝命しております小林です。建設会会員の皆様方におかれましては、日頃より都市システム系の教学・同窓会活動にご支援、ご協力を頂いておりますこと、心よりお礼申し上げます。

一九九四年に開学したBKCKキャンパスは、今年で二十六年目を迎えました。私は、BKCK開学と同時に本学の旧土木工学科に入学し、その後、トータル十年間をこのBKCKで過ごしました。

二〇一七年春に教員として母校に戻って参りましたが、学系の研究室が集うトリシアを含め、校内には新しい校舎が立ち並び、開学当初とは大きく様変わりしたキャンパスの風景に驚いた次第です。開

学から四半世紀を過ぎても古さを感じることなく、整備の行き届いた良い環境の中で、学生も充実したキャンパスライフを楽しんでいるように思われます。

我々、都市システム学系も進化を続けています。大きな変化とし

ては、二〇一八年度より都市システム工学科と環境システム工学科が合併し、環境都市工学科が誕生したことが挙げられます。これにより、建築都市デザイン学科と環境都市工学科の二学科で「都市システム学系」を構成し、環境・防災・都市創成といった分野で活躍できる人材の育成に取り組んでいます。現在(五月時点)、都市システム学系全体で一〇四三名の学部生、一七八名の大学院生が在籍し、正課に、研究に、課外活動に励んでいます。

教員体制にも異動がありました。長年、本学系の発展にご貢献いただいた深川良一教授(環境都市工学科)と及川清昭教授(建築都市デザイン学科)が二〇一九年三月をもって定年退職されました。両先生には、特命教授として、引き続き本学の教育・研究に携わって

いただいております。また、同じく二〇一九年三月をもって山田悠二特任助教(環境都市工学科)が退職されました。一方、新しい顔ぶれとして、二〇一九年四月より長谷川知子准教授、金度源准教授、矢澤大志助教、福原大祐初任助教が環境都市工学科に着任されました。同学科では、野村泰稔先生が教授に昇進されました。現在、環境都市工学科二十六名、建築都市デザイン学科十三名の総勢三十九名の教員体制のもと、学系の更なる発展を目指していく所存です。

近年、建設分野へのICT導入にも見られるように、専門分野の多様化、細分化、高度化が進んでいます。同時に、異分野との融合なしでは成立しえない世の中になってきているように思えます。昨年度、都市システム学系は創設八十周年を迎えましたが、百周年

を迎える二十年後には、建設業界は大きく様変わりしていることでしょう。変化が激しく、どのように様変わりするのかすら予測が困難な時代を生きていかなければなりません。学生が社会に出る前に知っておいて欲しいことが増えてきていますが、「アレもコレも」を教えることは不可能です。複雑化の進む社会において、学生に求められる知のあり方も変化してきています。立命館学園では、「学園ビジョンR2030」のひとつに「社会の変化に対応し、自ら考え、行動する人間」の育成を掲げています。不易流行を見極めつつ、学系教員一丸となって、R2030の実現を推し進めていきたいと思えます。今後とも変わらぬご支援を賜りますようよろしくお願い致します。

会員の声

関東建設会より



関東建設会会長
肥後満朗
昭和四十九年卒

関東建設会の会長に就任し六年が経過しました。そして関東建設会は今年で五十四周年を迎えようとしております。このように長い期間建設会が継続できていることに対し、諸先輩方をはじめ会員の皆様方の努力に敬意と感謝の気持ちでいっぱいです。

古くから活動されている方々に聞きますと、関東建設会の発足には、当時の道路公団に勤務されておられた有賀秀樹先輩（昭和三十四年卒）や田中健明先輩（昭和三十六年卒、前列右から三人目）方のご尽力によるところが大きいということだと思います。また私が会長に就任してからも、ゴルフだけでなく会の運営に関しましても色々ご指導をいただき、大変心強い先輩方のご指導をいただきました。ところが、本年四月、突然田中先輩逝去の悲報を受けました。大変残念なことです。田中先輩は、常々「立命館大学建設会を、慶応の三田会のように後輩を強力に支援できる組織にしたい！」「そのためには、一部上場企業のトップを立命から一人でも多く輩出する必要がある！」「建設会は、トップを輩出することへ何か支援ができないか！」と熱く我々後輩に語ってくれました。



方々にご指導いただいたり、刺激を与えられたりと、メンバーに恵まれたよい環境であったと感謝しているところです。

私自身は、まだまだ体力も充実しており、四月からは以前から付き合ひのあった会社に再就職し常勤しております。最近は何かしっかりと勉強したい！という気持ち湧いてまいりまして、自宅に広い机を設けて勉強の目標を模索しているところです。

最後になりますが、立命館大学建設会の益々の発展と、会員の皆様方のご多幸をお祈りいたします。

北海道胆振東部地震を通じて



北海道支部
城戸 寛
昭和五十五年卒

我々後輩は、先輩のような矜持を持って物事に当たっているだろうか？少なくとも私自身は田中先輩の申し送り事項を直接実践することには力不足ですが、本会の会則の目的である「会員並びに母校の発展」のために「ビジネスとプライベートのネットワークの構築」を充実させることに力を入れて会を運営して行きたいと思っております。

以下、私事ではありますが、本年三月末を持ちまして立命卒業と同時に入社したゼネコンを退職いたしました。実に四十五年間も同一の企業にお世話になったわけですが、企業に所属したことを「お世話になった！」と表現するのが、今の正直な気持ちです。初めの二十七年間は技術部門の土木技術屋として、後半の十八年間は支店長や経営層として勤務しました。この間に、例えば三十カ国ほどの海外出張や社会人ドクターコースでの勉強など、様々なことを体験いたしました。すべて会社の仕事としての体験であり、自分自身がこれらの体験を通じてどこまで成長したのかわかりませんが、貴重な体験であり「人は仕事を通じて成長する！」というのが実感です。また、企業には背景やタイプの異なる様々な方がおられます。これらの

平成三十年九月六日午前三時七分、北海道胆振地方中東部を震源としたマグニチュード六・七の地震が発生、平成二十八年の熊本地震以来で国内では六回目、北海道では観測史上初となる最大震度七が厚真町で計測された。そして、十八分後の同午前三時二十五分、北海道の電力がほぼすべて停止するブラックアウトが発生した。電力会社のエリア全域での停電は、平成二十三年の東日本大震災でもなく、現在の電力供給体制になって全国で初めての事態に至った。

札幌市内でも、観測史上最大となる震度六弱を東区で、私の住む北区でも震度五強を観測した。揺れによる我が家の被害はほとんど無かったが、オール電化のため翌七日の午後九時頃まで続いた停電には、留守宅の娘たちは悪戦苦闘したようだ。北区と同震度の清田区里塚地区の住宅地では大規模な液状化が発生。沈下は帯状に延長二百五十メートルにわたって広がり、深さは最大三メートルに達した。

数年程前からは、かねてから行ってみたかった国内外の観光地への旅行を楽しんでいる。まだ、クオーターまでだがマラソンも始めた。そのための体力づくりを兼ねて山登りにもチャレンジしており、一昨年、富士山登頂に挑戦。ご来光を望むこともでき、一つ夢が叶った。

昨年は、九月初旬にイタリア観光ツアーに参加。ミラノ、ベネチア、フィレンツェ、ローマなどなどの街で、多くの世界遺産や素晴らしい芸術文化に触れることができた。

ところが、その間に、大災害が北海道を襲っていた。

私の住む岐阜



岐阜県支部
若原 潔
昭和五十八年卒

阪神淡路大震災が発生した平成七年に技術士資格を取得して以来、防災減災に関する調査研究や液状化のあった清田区を含め講演活動を継続してきた。平成二十九年からは日本技術士会北海道本部防災委員会委員長として、全国の技術士とも連携し、技術士会としての活動の方向性を模索している。今回の震災を間近で受け止めて、そして、更に国が切迫しているという警告する千島海溝巨大地震など今後自然災害に向けて、引き続きライフワークとして取り組んでいく思いを強くしている。

長寿化の進行により、これまでの「教育↓仕事↓引退」の三つのステージで終えるのではなく、新たな節目や転機を迎える時代になっている。昨年の北海道胆振東部地震も通じて、これまで以上にその次のステージを積極的に受け止め、ライフ・シフトしていきたいと考えている。

そして、今年はまだ一つ夢を叶えるため、地道なトレーニングを重ねている。十二月にホノルルでフルマラソンに挑戦する。体の故障、不調を訴える友人らが少しずつ増える年代になり、元気なうちに取り組みむことにした。行ってみたかった地の観光旅行をかねて、楽しみたいと思っている。

「ライフ・シフト」という書籍が話題になっている。

戦国時代、「美濃を制する者は天下を制す」と謳われた拠点が岐阜（井の口）です。岳父斎藤道三が築いた井の口を手に入れた織田信長は、岐阜と名付け「天下布武」を掲げ天下取りに邁進、戦国城下町を築きました。この魅力に満ちた「岐阜」を紹介します。

信長は冷徹非道・革命者のイメージで語られます。「天下布武」は一般的に「天下を武力で平定する」と捉えられていますが「武」は戦を止める意味があり、平和的に平定することを宣言しています。また、「岐阜」は中国故事の『周の文王が岐山より起り、天下を定む』と孔子の生誕地『曲阜』から名付け、泰平と学問の繁栄を望んでいたのです。

山頂上の岐阜城にも招いています。現在は金華山ロープウェイで、山頂駅まで五分です。岐阜城天守閣から長良川の自然美のほか、岐阜市の街並みや濃尾平野が一望できる絶景を、信長も平和の願いを込めて眺めていたことでしょう。特に夕方、西の京都方向を見ると眼下に黄金に輝いた長良川、その向こうに黄金の都があるように感じます。まさに、天守閣からの眺めは至宝のおもてなしであったのでしよう。

JR岐阜駅に降り立つとホームより金華山岐阜城が視界に広がり、市内に一歩足を踏み入れると、黄金の信長像が皆さんを迎えてくれます。急峻な岐阜城や、その城下で信長が行っていたことは、戦いではなく手厚いおもてなしでした。武力で征服するのではなく、公家・商人・有力大名・有力者をおもてなしすることで仲間になりました。金華山山麓には比類ない巨石庭園を持った迎賓館が造られ、岩盤を利用した滝のある庭園が発掘調査により複数発見されています。信長に援助を求めたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは山麓の建物を「地上の楽園」であり四階建ての「宮殿」と記しています。発掘箇所を見学すると、当時の様子が思い浮かびます。

松尾芭蕉は「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」と有名な句を残し、チャップリンなど国内外の賓客が鵜飼を観覧に訪れています。

宮殿でおもてなしを行い、金華山頂上の岐阜城にも招いています。現在は金華山ロープウェイで、山頂駅まで五分です。岐阜城天守閣から長良川の自然美のほか、岐阜市の街並みや濃尾平野が一望できる絶景を、信長も平和の願いを込めて眺めていたことでしょう。特に夕方、西の京都方向を見ると眼下に黄金に輝いた長良川、その向こうに黄金の都があるように感じます。まさに、天守閣からの眺めは至宝のおもてなしであったのでしよう。

信長の花押は来年の大河ドラマ『麒麟がくる』と同じ麒麟の『麟』です。麒麟は神聖な幻の動物と考えられ、王が仁のある政治を行うときに現れる神聖な生き物です。

麒麟が現れる仁のある国を目指したと思います。信長が築いた日本遺産『信長公のおもてなし』の地、おもてなしが集約された戦国城下町岐阜市を体感しに来て下さい。

弥生時代の遺跡を保存活用、まちなかに巨大公園が誕生



建立会会長
細井正也
昭和五十九年卒

皆様、はじめまして。私は、昨年の八月に、建立会会長に就きました。高槻市技監の細井です。よろしくお願ひ致します。

さて、昨年は、大阪府北部地震や西日本豪雨、台風二十一号などにより、甚大な被害が多数発生し、大変な年でしたが、面白い話題も幾つかありました。今回はその中の一つである今年三月に高槻市が開園しました「安満遺跡公園」について、ご紹介させて頂きます。

「安満遺跡公園」は、平成三十一年三月二十三日に、一次オープン（約四ha）を迎えました。公園名になっている安満遺跡とは、約二千五百年前、近畿地方でいち早く米作りをはじめた弥生時代の大環濠集落跡のこと。弥生時代の遺跡では、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や静岡県の登呂遺跡等、数多く発見されていますが、居住域、生産域、墓域の三つの要素が、一つの遺跡で確認されているのは、全国でここ安満遺跡だけです。そういったことから、弥生時代の「クニ」の変遷課程を明らかにすることができ、極めて重要な大規模遺跡として国の史跡に指定されています。



公園完成イメージ

公園全体が完成すれば、約二十二ha（甲子園球場約五個分）の、みどりの大空間が、高槻のまちなかに誕生します。この公園には、四つの特徴があります。一つ目は、「市民とともに育て

つづける」をコンセプトに構想段階から将来の公園活動を見据え、弥生時代の古代米の栽培、森づくりに向けた植樹、子ども達が自由に遊ぶプレーパーク等の様々な市民活動がはじまっており、公園のパークセンターには市民活動の拠点が準備され、来園者と共に楽しく活動しています。

二つ目は、公園経営の視点から、魅力的な公園運営が行われるよう民間活力を積極的に導入しており、民間施設である子ども遊び場（ボーンランド・プレイヴィール）や飲食店（ピッツェリア&カフェ）が運営し週末は行列ができています。また、園内にたくさんさんのベンチが設置されていますが、これも寄付により揃えられたものです。

三つ目は、様々なイベントが開催されるように、公園施設のレイアウトを考え、屋根付き広場やステージにもなるテラス、座って観覧できる人工芝、また公園各所には電源や給水等のインフラを備えて、これまで多くのイベントが開催されています。

最後に四つ目ですが、本公園は災害時の広域避難地となり、防災



平成31年3月23日 オープニングイベントの様子

機能として耐震性貯水槽やソーラー照明、マンホールトイレ等を備え、地下には集中豪雨による浸水被害を軽減するための雨水貯留施設二万立方メートル（二十五mプール約五十五杯分）を設けています。

おかげさまで、開園から連日、大盛況を博しており、大変多くの来園者が訪れ、園内は笑顔で溢れかえっています。全面開園まで後二年。今後は安満遺跡の再現や新たな民間店舗の建設等が予定されており、ますます魅力的な高槻市のシンボルとなるよう努力して参ります。

場所は高槻市の中心部で、JR高槻駅から徒歩十三分、阪急高槻市駅から約十分と絶好の位置にあります。大阪いばらきキャンパスからも近いです。是非、お越し頂き、この公園の良さを肌で感じて頂きますことを切に願っております。

西日本豪雨災害から一年



広島県支部
藤田明彦
昭和六十一年卒

平成三十年六月末から七月初旬に発生した「西日本豪雨災害」か

ら一年が経ちました。複数の県に拡がった被害で、延べ二百二十四人の貴重な命が奪われ、私の住む広島県でも百九人の方が亡くなりました。仕事場でも、坂町という場所に住む社員も自宅傍に流れる河川で発生した土石流により被災し、四か月間の仮設住宅での生活となりました。

災害発生して一週間程で飛行機に乗る機会があり、上空から見ると広島空港周辺の山々には何十箇所も土砂崩壊の爪痕があり、河川には濁流の跡が生々しく見て取れました。

現在は、幹線道路や鉄道は概ね復旧していますが、一歩通りを踏み込んでみると被害の爪痕がまだまだ多く残っており、完全復旧には多くの時間や費用が必要と思われるます。

広島市では平成二十六年八月に広島市豪雨災害で土砂被害百六十六箇所、死者七十七人の災害が発生しています。しかし、その災害の経験は今回の西日本豪雨には教訓として反映されたとは言えないと思えます。思い起こせば、昭和六十一年に土木工学科を卒業し、中堅ゼネコンに入社して新入社員として配置されたのは仙台市でした。その八月に台風十号による水害が発生し、連続降雨四百mm以上で二百年に一度の大雨を体験しました。この大雨で仙台空港が水没するほどでした。

その後、二十八年間ゼネコンでの現場生活を過ごしましたが、常に台風や水害と向き合ってきたように思えます。実際に台風が起きるたびに現場待機・巡回パトロール・水害対策を何十回も経験してきました。

「自然の力の前では人間の力は非力だ」とよく言われます。実際に災害・水害が起きる時は自然の力には勝てませんが、古代の時代

より長い経験の積み上げにより人間は災害・水害と戦ってきました。世界の文明の発生した場所も大河に面した場所が多い事でもうかがえます。実際に栄えた文明は河川の氾濫を力で抑える「防災」ではなく、受け止め共存する「減災」の考え方で「治水」を行っていたと考えられています。

私の現場経験の上でも「土木」ではなく「土水」ではないかと思うことが多々ありました。水の力を無理に止めるような施工をする、必ずといっていいほどシッペ返しを受け、水の流れを受け流すような施工をすると思いのほか順調に完成する経験が数回あります。

私事ですが、五十歳を機にゼネコンを退社し、地元である広島のコックリート二次製品メーカーに転職し、技術部で設計業務を行っています。現場施工の頃は設計業務は縁のない仕事だと思っていました。思いのほか現場経験が設計業務を行っていく上でプラスとなる場面が多く、経験は無駄で無かったと実感しています。

昨今自然災害が多発し貴重な命・生活を脅かす事が増えてきています。今後は現場経験を踏まえ微力ながらも「減災」に貢献できるような製品を開発普及ができればと思っています。

仕事を振り返って



京都支部
松尾真希
平成二十二年卒

過去の会報を拝読していると、私の卒業した環境システム工学科が都市システム工学科と合併し、環境都市工学科になったとの記事がありました。

既にご存知の方も多いかと思いますが、恥ずかしながら存じ上げておらず、「卒業学科名は、無く

なったのか。」と少し寂しい気分になりながらも、「随時、変わりゆく社会や学生のニーズに対応していくためには、学科も柔軟に変化していくことが必要なのだ。」と社会のイロハのようなことを改めて感じています。

私は、京都府庁に平成二十二年に入庁し、これまで、土木事務所での道路行政、本庁での交通政策行政、現在の土木事務所での河川・砂防行政と、その時々で異なる貴重な経験をさせて頂いていただきました。

本紙では、その中でも、特に印象深い「交通政策行政」について、紹介させて頂きたいと思います。交通政策課での主な業務は、「JR奈良線の複線化に関すること」でした。

JR奈良線は、京都と奈良を結ぶ（正式には、京都駅から木津駅まで）西日本旅客鉄道（株）が管理・運営する鉄道路線であり、現状、京都駅からJR藤森駅、宇治駅から新田駅間のみが複線化している状況です。

京都府としては、複線化による「行き違い待ち解消による時間短縮」や、「輸送量の増加」。更には、「速達化による関係市町村の発展」等に事業効果を求め、JR藤森駅から宇治駅、新田駅から城陽駅、山城多賀駅から玉水駅の計十四・〇kmを複線化する事業について、西日本旅客鉄道（株）や関係市町村の協力を得て、取り組みを進めています。

私が在籍した四年間では、上司からのサポートもいただきながら、関係者との協定書の締結から工事の起工するところまで、携わることができました。

当時のことを振り返ると、「異なる立場の方々と合意形成の難しさ」や「全員が同じ方向を見て仕事をすることの重要性」、「工程管理の重要性」等、どの職場・職種でも共通して重要なことだと思

いますが、当時の苦勞や経験により、しっかりと学ぶことができたと感じています。

引き続き、公務員人生は続きますので、これまでの経験を貴重な財産として、日々精進していきたいと思っております。

なお、JR奈良線の高速化・複線化第二期事業は、二〇二三年春の開業を予定しています。複線化が完了すれば、「京都駅から城陽駅間」は完全複線化となり、奈良線の更なる利便性向上が図られることとなります。

沿線には、世界的に知名度が高い「伏見稲荷大社」や「平等院」等魅力的なスポットも数多くございますので、是非JR奈良線を利用し、京都にお越しいただきたいと思っております。

最後に立命館大学建設会の皆様のご健勝・ご活躍を祈念いたしますとともに、採用十年の節目に寄稿のお話をいただいたことに感謝をしながら、私の報告とさせていただきます。

着任の挨拶



環境都市工学科
准教授
金 度源

この春より環境都市工学科に着任致しました金度源(キム・ドウオン)と申します。

私は二〇〇九年一月に渡日し、二〇一一年三月には立命館大学大学院修士課程を修了、続いて二〇一四年三月には立命館大学大学院博士課程を修了して無事に学位を取りました。二〇〇四年から本学で取り組んでいる「文化遺産防災学」に入門し、ありがたくも着々と勉学を進めることができました。学位取得後には幸いにも立命館大学衣笠総合研究機構の専門

笠キャンパスにある「歴史都市防災研究所」を活動拠点とし、日本国内の文化財や歴史的な街並みと海外の世界遺産地区でも防災計画の実装に向けてフィールドベースの実践的な研究活動に取り組みました。二〇一五年にはネパール世界遺産地区、二〇一六年には熊本、ミャンマー・バガン仏教遺跡群、イタリア中部で地震が発生し文化遺産の被害状況を踏まえて特に途上国であるネパールとミャンマーでは被害にあった文化遺産の長期的な復興に向けて各国の担当

行政官や専門家を教育する研修プログラムを運用・指導しました。これらのような取り組みが認められ二〇一六年からは特別招聘研究教員(准教授)に着任し、歴史都市防災研究所の重点事業であるユネスコチャーター国際研修「文化遺産と危機管理」をコーディネートしました。文化遺産保存と災害危機管理の分野には接点がないことに気がつき本学が取り組み始めた文化遺産防災の分野はもろろん世界的にもその専門家が少なく、その必要性に感ずるために二〇〇五年神戸で開催された第二回国連防災世界会議の後にユネスコ認可の事業として取り組んでいます。世界から集まった専門家に対して3週間を超える質の高い研修プログラムを提供し、研修者はそれぞれの国に戻ってから研修で作成した防災計画の素案を着実に発展・実行しており、研修者や講師を中心として世界的な学術ネットワークが形成されました。

今までの研究と教育の成果が認められこの春からは古巣である環境都市工学科で新しく都市地域デザイン研究室を開くことができました。コンパクトシティや都市のスポンジ化が進む現代社会の中で、地域住民を含むまちのキープレイヤーとコミュニケーションを大事に取りながらまちづくりの貢献できる人材の育成と、まちの文化を

育むまちづくりの手法を理論化していく大きな課題を解決したいと思っております。立命館大学で学んだ研究への眼差しを基に頑張りたいと思います。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

着任の挨拶



環境都市工学科
准教授
長谷川知子

この春より環境都市工学科に着任しました、長谷川知子と申します。

環境システム工学を専門とし、統合評価モデルというエネルギー、経済、農業、土地利用、水利用、気候などを統合的に解析するコンピュータシミュレーションモデルを用いて、気候変動問題について研究を行っています。具体的には、国、アジア全域、世界全体といったマルチスケールで、二〇三〇年から今世紀末までの短中長期を対象とし、特に農業・土地利用分野における将来の温室効果ガスの排出量見通し、その削減方策の検討、気候変動影響の経済的分析を中心に行っています。さらに、食料安全保障問題、バイオエネルギー、生態系保全、水資源など持続可能な発展に関する諸事象についても解析を行っています。私は二〇一一年に京都大学工学研究科博士課程を修了しました。在学中は同研究科松岡譲教授のもとで農畜産業由来の温室効果ガス排出量とその削減ポテンシャルの将来推計について学びました。修了後、茨城県つくば市にある国立環境研究所で日本学術振興会特別研究員として三年間、特別研究員として二年間、テーマ型任期付き研究員として二年間勤めました。その期間、増井利彦室長(統合環境経済研究室)、高橋潔室長(広域影響・対策モデル研究室)らのも

と現在も継続的に開発・運用を続けているシミュレーションモデル、経済モデル(応用一般均衡モデル)、温室効果ガス排出削減のための技術選択モデル、空間分布を扱う土地利用モデルを開発し、これらを気候変動問題や持続可能な発展に関する研究に適用してきました。それを通じて、気候変動問題と食料問題とのかかわりに着目し、気候変動政策による飢餓リスクや食料安全保障への影響を明らかにしてきました。二〇一六年から日本学術振興会海外特別研究員としてオーストラリアの国際応用システム分析研究所にて、気候変動による食料安全保障への影響評価に従事しました。ここでは、農業・土地利用に関するモデリング技術とデータベース、研究設計から遂行、論文執筆までの一連の研究にまつわるノウハウを学びました。この度ご縁があり、立命館大学に就任させて頂きました。大学に就任させて頂きましたこと、大変嬉しく思うと同時に採用に関わられた先生方に心から感謝申し上げます。同僚アカデミックな業界でも大学でのお仕事は研究所とはまた違う筋肉を使う感覚を覚え、新たな面で自分自身を高められると期待しております。また、教育という人を育てるといってお仕事は大変でしょうが楽しくきつとやりがいがあるものと期待しています。私自身、これまで多くの方のご指導・ご支援を頂いて参りました。これからはこれまで自分にして頂いたことを還元するつもりで、若い人たちに伝え、未来の世代につなげていきたいと思っております。

事務局より

お知らせ

■会員登録データ

建設会会員名簿を隔年発行しておりますが、そのもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」をご確認いただき、修正や変更等がございましたら建設会事務局までご連絡下さい。

また、「2018年度会員名簿[CD-R版](2018.12発行)」は、対象年度の会費を納入いただいている会員に送付させていただきました。2018年度分の会費をまだお納めでない方は、同封の振込用紙にて2年分の会費(6,000円)を納入いただきますと、入金確認が出来次第、名簿をお送り致します。

■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。
2019年度会費のご納入をお願い致します(年会費:3,000円)。

銀行からのお振込も可能です(ゆうちょ銀行109(イチゼロキユウ)支店、当座0000884)。お振込の際、お手数ですがお名前の前に10桁の会員コードをご記入いただくか、お名前・会員コード・お振込日を下記アドレスまでご連絡下さい(振込手数料は申し訳ございませんが、ご負担願います)。

▶名簿お取扱いについて

名簿は、会員の皆様の大切な個人情報に掲載しております。名簿をお持ちの会員様は、その保管およびお取扱いには十分ご注意くださいようお願い致します(転売厳禁)。

なお、ご不要になった名簿につきましては、お手数ですが焼却あるいはシュレッダー処分をしていただけますようお願い致します。

◆100周年記念オール立命館校友大会◆

——理工系学部・同窓会合同企画——

「理工系学部の新展開と日本の科学技術の挑戦」 のご案内

日時:2019年10月19日(土)12:00~13:30

会場:グランドプリンスホテル京都

定員:400名

開設25周年を迎えたびわこ・くさつキャンパス(BKC)と共に歩む理工系学部の新展開をご紹介するとともに、日本の科学技術の挑戦のシンボルであるJAXAの「はやぶさ」プロジェクトを推進する宇宙科学研究所 國中均所長にご講演いただきます。

校友会100周年、BKC開設25周年にあわせた理工系学部・同窓会合同企画です。建設会会員の皆様もぜひご参加ください。詳細、お申込みは、下記のURLからお願いいたします。

<http://hajimari.info/2019kyoto/>

建設会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部都市システム系事務室内(担当:山元)
TEL:077-561-4911 FAX:077-561-2667

<https://ritsumeikensetsukai.net>
E-mail:kenstkai@st.ritsumei.ac.jp
会費払込郵便振替口座:02 大阪 01080-1-884

※なお、8月10日~18日まで、大学一斉休暇となります。何とぞご了承下さい。